

『十二類絵巻』の主題

——狸の描写、鵺と仏教に着目して——

梅 田 昌 孝

はじめに

『十二類絵巻』は、一般に、室町時代には成立したとされる。室町期から江戸期にかけて制作された、いわゆる「お伽草子」と総称される作品群に分類される作品である。洪川版二十三編のことを指して「御伽草子」と呼ぶ場合もあるが、ここでは、それと区別するため、室町時代から江戸期にかけて制作された物語群の総称として、「お伽草子」という呼称を用いることにする。

『十二類絵巻』には、伝本が多く存在する。以下それらを列挙する。^{①②}

- ① 旧堂本家本（現、京都国立博物館寄託）^③
- ② 細川家永青文庫本
- ③ 静嘉堂本

- ⑤ 金比羅宮本
- ⑥ 東京国立博物館本
- ⑦ 国会本
- ⑧ 大阪市立美術館本
- ⑨ ケルン東洋美術館本
- ⑩ 神宮徴古館本
- ⑪ チェスター・ビーター・ライブラリー本^④
- ⑫ สเปนサーコレクション本
- ⑬ 逸翁美術館本
- ⑭ 慶応大・奈良絵本
- ⑮ 慶応大・写本
- ⑯ 早大図書館本
- ⑰ 早大図書館本
- ⑱ 獣太平記^⑤

⑬ 大阪青山短期大学本

本論考では、これら諸伝本のうち、最古の巻本とされる旧堂本家を底本として用い、分析を行うこととする。旧堂本家は、一四四一年には成立したとされ、最も古態をとどめる善本である^⑦。この旧堂本家は、従来冒頭部を欠いていたが、粉河寺縁起絵巻の紙背に冒頭部が書かれたものが発見され、補って解釈されるようになった^⑧。詞書は、上巻、後崇光院貞成親王、中・下巻は青蓮院入道親王とされている。絵の方は、土佐派の作と見られているが、描いた人物を特定するまでには至っていない^⑨。以上のことが旧堂本家本について分かっている。

本論考では、数あるお伽草子の内、成立年代と書写者が分かっている稀有な作品である『十二類絵巻』を取り上げ、本作品が、当時どのように読まれていたのか、ということを明らかにしたい。以下、『十二類絵巻』の主題について、先行研究を見ながら、その問題点を挙げていく。

序 『十二類絵巻』の研究史

本作品の主題については、従来様々な解釈が試みられてきた。網野善彦氏は、本作品の主題を十二類（京の公卿・京の侍）対狸勢（田舎侍）という対立として解釈された。

『十二類絵巻』は、十五世紀中葉の貴族社会の人々が、中世都市として成熟した京都世界を脅かしつつあった、「田舎」——諸地域の勢力や「土民」「悪党」たちの動きを、いわば文明的な十二類と、野性的な狸軍の合戦という形でコミカルにとらえ、自らの期待する方向で、十二類——京の侍たちの勝利に終わらせ、その絵と詞を通して鳥獣尽しの意味を盛り込もうとした作品とすることができよう^⑩。

このように、網野氏は、下剋上に対する風刺の物語として『十二類絵巻』をとらえる。小峯和明氏にもこれと同様、次のような指摘がある。

中世後期の公家が土一揆などの頻発する状況をたぶんに風刺するために製作した絵巻と思われ（中略）『十二類絵巻』の物語そのものが「狸の京上がり」という、当時の下剋上の風潮を風刺し、成りあがりやを揶揄したらしいことわざを物語化したものであったろう^⑪。

小峯氏も網野氏と同様に、土一揆が頻発する社会状況の風刺の物語として本作品をとらえる。

このように、『十二類絵巻』は、風刺の物語として解釈されてきたのであるが、この従来の解釈に対して、勝俣隆氏が疑義を呈した。勝俣氏は、『十二類絵巻』について、次のように解釈される。

個人的には、「狸の京上がり」という言葉が最初にあったのであり、その具現化のためにこの作品は作られたのではないのだろうかと推測するので、敢えて当時の社会的風潮への批判を積極的に読み取る必要はないのではないかと考える。(中略)

この作品は単純に言えば狸を主人公にした言葉遊びの戯作であろう。それに絵が加わることで、よりダイナミックな言語と絵画の複合した知的遊戯となったのではないか。¹²⁾

網野氏や小峯氏が社会状況への風刺として、『十二類絵巻』が描かれた、と解釈したことに対して、勝俣氏は、「狸を主人公とした『言葉遊びの戯作』が本作品の主題であり、風刺は、直接主題には結びつかないのではないかと指摘されている。

稿者の意見としては、勝俣氏と同様、風刺が直接本作品の主題であるとは考えにくいとする。なぜならば、本作品は、狸に焦点をあてた、狸を主人公とする作品として読むのがよいと考えるからである。もし風刺が直接作品の主題だとするならば、次のように描かれる狸の出家遁世の場面が説明できない。

年来すみなれし、つか穴、所領と憑し園林、みな妻子ともに、
ゆつりて、心つよく、煩惱の家を出、菩提道に入ければ、妻子
眷属も、なこりを、おしみて、なくく、わかれけり、いとあ
はれになむ¹³⁾

『十二類絵巻』の主題

これは、狸が度重なる恥辱を受けたことから世の無常を悟り、出家を決心する場面の描写であるが、「いとあはれになむ」という語が挿入され、語り手が狸の行動に対して、評価を述べている点特徴である。この他にもう一例、語り手が狸の行動に評価を述べている部分がある。それは、次の遁世の場面である。遁世場面では、次のように描写される。

彼沙門家郷か、俗網をのかれて、台山に遊し時、五酔を除却し、四魔を降伏せしにも、猶その降せざるは、た、詩魔のみなりとこそ、源順は、かきと、め侍しか和漢ことなれとも、余執は、おなしこ、ろにこそと、いとやさしくも、はんへるかな¹⁴⁾

このように、遁世の部分では、遁世を果たした狸に対する評価がなされる。詩魔だけを克服できなかった事は、家郷という中国の出家者ですら、できなかったことであり、このことを源順を引き合いに出して、感心な事であると評している。

これらの例において、狸に同情を寄せる語りがなされていることを考えると、網野氏や小峯氏が指摘している風刺という解釈は、作品の主題にはならないように思える。

一方、勝俣氏の言語遊戯の戯作という説についても疑問が残る。確かに、『十二類絵巻』には言葉遊びが数多く描かれ、「言葉遊びの戯作」としての面も持っていると考えられるが、「言葉遊びの戯作」

は、表現の特徴を説明したものであり、当時の読者が本作品を読んだうちに、何を読み取っていたのか、という主題に関しての説明はなっていない。勝俣氏の分析では、作品全体の分析ではなく、主に画中詞に焦点が当てられて議論が行われており、作品全体から主題を読み取る、という視点が欠落している。

『十二類絵巻』は、詞書で場面の概要が示された後、絵と画中詞によってその場面の詳細が描かれるという構成をもっている。よって、作品の主題を考える際には、詞書・絵・画中詞という三つの要素を、総合的に読みとった内に、作品の主題を考える必要がある。

以上のように、先行研究においては、風刺の物語としての解釈、そして言葉遊びの戯作としての解釈があるということが分かった。しかし、それぞれの説に疑問が残る。本論考では、これらの先行研究への批判から、『十二類絵巻』を、詞書・絵・画中詞という三つの要素全てが作品を構成しているものととらえ、総合的に分析して、作品がどう読まれていたのか、ということを明らかにしたい。

第一章 『十二類絵巻』の分析

第一節 物語の主人公

まずは、狸が主人公として描かれていることを確認するために、『十二類絵巻』の場面分析を行うことで、狸が主人公として描かれ

ていることを確認したいと思う。『十二類絵巻』は、詞書が書かれて、場面の状況を示した後、絵と画中詞がその場面の詳細を描くという構成をもつ。場面分析は、ともすれば、読者の恣意的な場面の分割に陥りがちになるが、絵巻という形態は、詞書・絵・画中詞という明確な場面提示がなされている。よって、これらから導かれる場面は、読者の恣意的な分割ではなく、作品の側から提示されるものであり、より客観的な場面分析が可能である。場面は以下のよう分割できる。

歌合

- ① 鹿・狸の推参。
- ② 十二類の歌合。
- ③ 歌合の終わり。その後の宴会。
- ④ 狸の推参と打擲。

合戦

- ⑤ 狸、恥を雪がんと軍を語らう。
- ⑥ 合戦。十二類の先制。狸の敗走。
- ⑦ 鴉、狸に再戦を促す。
- ⑧ 戦士再結集。夜討の成功。太郎坊への要害。
- ⑨ 十二類の逆襲。狸、再び敗走。
- ⑩ 狸、鬼に化けるが、犬に吠えられ失敗。

出家遁世

① 狸の出家。

② 狸の腹鼓と踊念仏。

③ 出家遁世し、京上りの本意を遂げる狸。

『十二類絵巻』を詞書と絵によって導かれる場面によって分割すると、以上のようになる。これをまとめると、全体の構成は、歌合・合戦・出家遁世となる。この構成の中で歌合の部分は、主に十二類と鹿が中心となって描かれるが、合戦場面以降、合戦と出家遁世の場面では、狸が中心に据えて描かれる。前の①から②までの場面分割でも、⑤の狸が軍を語らう場面からは、狸が恥を雪がんとために合戦を仕掛けた、という趣旨の下で、物語が展開されていることが確認できる。このように、大枠の場面分析では、歌合・合戦・出家遁世という場面として捉えることができ、その物語の半分以上の分量を割いて、狸の合戦と出家遁世までの流れが描かれるのが『十二類絵巻』の場面構成上の特徴である。

多くの分量を割いて描写される場面は物語の中心を為す部分である。『十二類絵巻』においては、合戦・出家遁世の場面であるが、そこにおいて、狸が中心となっていることを考えると、『十二類絵巻』は狸を主人公として描かれている、と考えることができよう。

第二節 弱者として描かれる狸

本節では、主人公として描かれる狸が、作中でどのように描写されているのか、という事を確認し、作品の主題に迫るアプローチとする。

まず、場面の内容から読み取れる狸について述べる。狸は、歌合の場面で推参し、打擲を受ける。そして、その恥を雪がんと合戦をしかけるのであるが、結局大敗を喫してしまう。本文中では、狸はこれらの敗退を、「二度の恥辱を、せむかたなくこそ思けれ」^⑬と二度も恥を受けたとして大変悔しがる。そして何とか雪辱を果たそうと鬼の姿に化けるのであるが、竜はおろか、犬にまで正体を見破られ、「この企ても、むなしく、ととま」^⑭ってしまふのである。各場面において、狸は、歌合での打擲で恥を受け、合戦の敗退でも恥を受け、化けて雪辱を果たそうとするも失敗する、というように、企てを悉く失敗する弱者として描かれているのである。

次に、作中で、狸の描写がどのようになされているかである。最初に、十二類からの狸に対する評価が描写される部分である。前節の場面分析の①鹿と狸の推参の場面において、絵の方に目をやってみると、狸が刀を右側に差して推参している様子が描かれている事が確認できる（図一資料参照^⑰）。刀は、通常左側に差すものであり、狸はそういう刀の差し方すらもわきまえない者として描かれている。

『保元物語』「為朝鬼島二渡ル事并ビニ最後ノ事」には次のようにある。

其島ノ人ノ形チ、長ケ一条余ナルガ、皆大童也。刀ヲバ右ノ脇ニゾ指シタリケル。云事、互ニ聞知ズ（中略）其島ノ住人等、鬼ガ末ニテ、長ハ一丈余リニテ、皆童也。刀ハ右ノ脇ニサイテ、何事モ人ニハ違ヘリ。^⑮

これは、為朝が保元の乱に負けて、伊豆の大島に流された際、その島の住人と出合い、島の住人を制圧してしまう、という内容の物語の一部である。この物語中では、島の住民は、自分たちを昔は鬼であったと名乗るが、その容貌は、全く鬼とは似つかない者であった。為朝一行は島の住人のことを「ゲニモ、タケ高く、ツラ長シテ大也。鬼島トハ不レ可云」と述べる。そして鬼とは似ても似つかなかった島民は、刀を右に指す者たちであり、それは、人とは違うことだったのである。

他に狸に関する描写を探すと、⑨十二類の逆襲の場面において、画中詞の鶏の言葉に「京上もせぬ、たぬき太郎」^⑩馬の言葉に「お中武者のことはかな」^⑪「凡下のためき」^⑫というような描写がみられる。狸が田舎武者として描かれていることが、ここから読み取ることができる。しかし、刀を右に差して推参した、という絵には、田舎武者ということを表わす以上の意味がありそうである。『保元物語』

の例によれば、右に刀を指すことは、常識的には行われな性格好だということである。たとえ、田舎武者であっても、刀を右に差して推参することはしないはずである。作中でも、狸軍の兵士達は、刀を左に差していることが確認できる。狸は、そういう常識的な事すらもわきまえない者、他の武士よりも低位の者として描かれているのではないだろうか。

狸に対する描写をもう少し詳しく見ていこうと思う。④狸の推参と打擲の場面で、狸は、次のように述べ、歌合の判者になろうとする。

御辺たちは、わつかに一時をこそ、まもり給へ、又前の判者も、一月に十日をこそつかさすると、なのりしか、我は、ふた月を領し侍りそのゆへは、たちぬる月の、たはいかに、ぬはいかに、きはいかに、みくるしけに、さうそよ。^⑬

鹿が判者となる際、自分の名が一月の内に「二日（ふつか）」「三日（みっか）」の「か（鹿）」として用いられていることを根拠に、正当性を述べたことをまねて、狸も「たちぬる月（たちぬるつき）」という語を根拠に挙げた。しかし、狸の主張の正当性は認められず、打擲される羽目になってしまうのである。主張の正当性を認められることなく、打擲の恥辱を受けるのが、狸なのである。

⑥の合戦・十二類の先制・狸の敗走の場面では、狸が合戦をし

けようとしている事を伝え聞いた十二類が、狸の事を「やすからぬ事なり、狸ほどの奴を、敵にうけて、よせられたらんは、いかかひなし」²³と評する。狸が語らった軍によって不利な状況に追い込まれることをみつともないという。狸がとるに足らない者として描かれている、ということである。

このように、狸はとるに足らない下位の田舎武者として、十二類にぞんざいに扱われる描かれ方をしている。

また、⑥合戦・十二類の先制・狸の敗走。の場面で、狸軍夜討の情報を得た十二類軍が狸軍を攻めにやってくるくだりに、次のような描写がある。

狸、思の外の、心ちして、あはてさはきけれども、語ふ所の輩、さすがに、恥ある兵なれば、すこしもさはかす²⁴

攻めてくる十二類軍に、狸は慌て騒ぐ、それに対して、狸軍の兵たちは騒がずに対応をする。狸と他の兵が対比的に描かれている。他の兵が騒がず堂々と対応するのに対し、狸は慌て騒ぐ小心者である。軍の大將であるにも関わらず、不測の事態に慌て騒ぐのが狸であり、この姿は何とも滑稽である。武士としての対応は、狸軍の兵士達がとったような、慌てさわがず戦に臨むことであり、狸はそのような常識的な事すらもまともに行えない者として描かれている。狸軍兵士達を一般的な田舎武者だとするならば、狸は、それらの田

舎武者の中でも、取るに足らない弱者として描かれているのである。

第二章 仏教という枠組み

第一節 『十二類絵巻』における鶏

『十二類絵巻』の冒頭は、次のように始まる。

夫諸佛菩薩の本誓平等なりといへども、像法転時の利益ことにすくれましますは、薬師の悲願なるべし、衆病悉除身心安樂のちかひ、速証無上正等菩提の文、現当共にたのもしくこそ侍れされは釈迦如来は彫刻して療病院の本尊とし、伝教大師は造立して天台山の人法をひろめ給へり

しかのみならず、天武天皇は伽藍を立て、宝祚をたちたまひ、道昌僧都は霊像をむかへて法験をあらはす、参詣帰依の人は身のうへの厄難をはらひ、恭敬供養のたくひは心中の願望をみつ、十二大願偏に衆生の為なれば、十二神将もみな我等をまもり給、かたしけなしと申もおろかなり²⁵

と、仏教の由来と薬師十二神将の利益が説かれる。冒頭にこのような記述がみられるということは、本作品は、仏教の思想が背景にある、ということである。

小峯氏は『十二類絵巻』が仏教の枠組みによって構成されていることを、画中詞の分析から指摘された。小峯氏によればこうである。

それにしても、たかが古鴉が殺される場面にしては異様なほど長いせりふである。なぜこれほど鴉の最後のことが重視されるのか。ひとつには天狗とのかかわりが考えられる。(中略) この物語の深層には『今昔物語集』巻二十第十一話に類する、龍と天狗の対決がしかけられているとみなせよう。太郎坊は中巻末尾の詞書に、狸が鴉の仲介で愛宕山の要害を頼る場面に登場するが、画面には出てこない。しかし、物語の深層には異類の総帥たる龍と天狗の対決(仏法の守護者と反逆者などの対比)があるといえよう。古鴉をめぐる画中心はそのような物語の構造をあぶり出す。²⁶⁾

このように、小峯氏は、画中心に着目することで、物語の深層に龍と天狗、つまり仏教とその反逆者との対立構造があることを指摘された。小峯氏の指摘されているとおり、画中心から仏教とそれに反するものの対立構造が読み取れることには納得である。本章では、この指摘を受け、当時、鴉・天狗はどのように認識されていたのか、という事を『十二類絵巻』の詞書、そしてその他の作品からの用例を挙げることで考証していく。

- 詞書に見られる鴉に関する描写は以下である。
- 愛宕護の山の古鴉(狸が軍を語らう場面)²⁷⁾
- 一方に憑つる鴉は天狗くしき者にて、かえりちうして、飛

うせぬ(合戦の場面)²⁸⁾

• 其後、太郎房に案内まうして、あたこの嶺に引あかり、くつれ坂ほりきりて、たてこもりなは、十二類の人さもいかてか、たやすく落へき(鴉が再戦を促す場面。鴉の台詞)²⁹⁾

このように、詞書でも、「愛宕護山」「天狗」「太郎房」といった描写が見られ鴉と天狗が関連していることが分かる。『十二類絵巻』において、鴉は、天狗の眷属Ⅱ仏教への反逆者として描かれているのである。

第二節 鎌倉・室町期の天狗観

天狗が仏教への反逆者であったということは、従来から指摘があり、森正人氏は『今昔物語集』中の天狗には、反仏法的性格があるということを描かれている。

今昔物語集に描かれる天狗はきわめて鮮明である。すなわち、彼らは魔縁とか魔界とか呼ばれて、仏法に障碍をなすものとして登場する。反仏法的存在、これが天狗なるものに与えられた最も基本的な性格であろう。³⁰⁾

森氏の指摘によれば、『今昔物語集』では天狗は反仏法的存在として描かれるということであり、稿者もこれに納得である。

本節では、森氏が『今昔物語集』において指摘したのと同様に、

『十二類絵巻』が読まれた当時の天狗にも仏教への反逆者という性格があつたということを示したい。具体的には、『天狗草紙』『是害坊絵』『秋夜長物語』『看聞日記』から、当時の天狗観がどのようであつたのかを確認して行くことにする。³¹⁾

まず『天狗草紙』から見ていく。『天狗草紙』は、仏教界が乱れる様子を、天狗に仮託して風刺した絵巻である。³²⁾ この作品の中で天狗は、次のような存在として描かれる。

如此、天狗、処々道場にいたりて、異曲をわかし、凶害をなす。これによりて、人多邪見に住して、愚儀をもほらにす³³⁾
天狗による偽の功德によつて、人々が騙されていく様子である。これを天狗の「凶害」としている。仏教の乱れを、天狗ののさばる姿を通じて描いている。つまり、仏教が乱れる＝天狗がのさばる、という構図がある。仏教に反するものとして、天狗が認識されていた、ということである。

次に『是害坊絵』。『是害坊絵』の内容は、唐の大天狗是害坊が、日本の仏教妨害を企て来日するが、結局失敗に終わり、湯治をして帰国する、というものである。本文には是害坊が日本を訪れる場面において、本文では、次のように書かれる。

日本ハ小國辺卑ノ境ナレトモ、仏法東漸ノ國ナレハ、日本定メテ、有知有行之僧モアルラン、且ハ行徳ヲモ推計、且ハ出離

ヲモ、サマタケントテ、来レル也³⁴⁾

日本は小国で辺鄙な国であるが、仏教の国であるので、徳のある僧もいるであろう、と日本の仏教を妨げようとして来日しているのである。仏教の妨害をするという天狗像を読み取ることができる。

さらに『秋夜長物語』では、比叡山の桂海という僧と、三井寺の梅若という児が恋に落ちるが、梅若が比叡山に向かう際に天狗にさらわれる。梅若の失踪に衝撃を受けた三井寺と比叡山の間に戦が起こり、それに責任を感じた梅若が自殺。梅若の死を知り無常を感じた桂海が発心する、という内容である。お伽草子の宗教小説の内の稚児物に分類される作品である。³⁵⁾ この作品中での天狗の描写は次のようになされている。

座上の天狗、何と読たりけるそと、問ければ
うかりける、はち三井寺の、ありさまや、戒つくりてはねを
のみそなく

と読て候也と、かたれば、座中の天狗共、えつほに入てそわらひける³⁶⁾

これは、梅若がさらわれた事によつて、山門と寺門の対立が起こり、気分が良くなっている天狗たちの中で、一人の天狗が歌を詠む場面である。天狗は、三井寺について、戒律を作るのはいいが、それは形式だけの事であり、形骸化してしまつて機能していない、と

いう歌を詠み、それを笑う。仏教が弱っている様を笑っているのである。

以上のように、天狗は仏教への反逆者としてとらえられていることが分かった。では、実生活の中で、天狗はどのように認識されていたのであろうか。『看聞日記』の中に、天狗に関する記事が散見されるので、それによって作品が読まれた当時の天狗観を見ていく。

『看聞日記』は、本作品の書写者とされる後崇光院貞成親王の日記であり、ここに見られる天狗観は、作品の読解に資するものとして用いることが出来る。『看聞日記』に見られる天狗の記事は以下である。

九日大塔上ニ喝食ニ三人・女房等徘徊、入夜蠟燭二卅延ハカリトホシテ見ヘケリ、不経幾程炎上云々、天狗所行歟云々（応永二十三年正月九日）³⁷⁾

この記事では、大塔の上に、喝食と女房が三人徘徊しているのが見えたが、夜になって、蠟燭を三三十ともしている、すると、ほどなくして、大塔が燃え始めた、というのである。このことを指して、天狗のせいではないか、と推測している。天狗の仕業によって、大塔に火が放たれたのではないかというのである。

次の記事も、火を放った天狗について述べる。

自曉至夜大風吹、如辻風、其時分押小路東洞院焼亡、比丘尼

庵一字炎上云々間、愛多護山火打三粉失、天狗取歟（永享八年三月六日）³⁸⁾

押小路通東洞院の比丘尼庵が焼け落ちた。その時、愛宕山では火打ちを三つ紛失していたという。このことから、東洞院の火事は、天狗の仕業なのではないか、と推測する。ここでも、火事が天狗の仕業だと推測されている。

行藏庵小喝食庵ニ火を付（中略）喝食申、小童二三人来、可付火之由申間、無何心付了、躰童同河中へ入云々、道之間板敷之上如歩行之由申、惘然之体也、天狗所為歟（永享八年三月廿三日）³⁹⁾

行藏庵に小喝食が火をつけた。しかし、小喝食が言うには、小童が二三人来て、火をつけるように言ったという。すると何とも思わず、火をつけてしまった、というのだ。小童はしばらくして河に入ってしまったという。このことを、天狗の仕業ではないか、と推測している。ここでも、僧庵に火が放たれたことと、天狗の仕業とが結び付けられている。実生活における天狗は、このように、火を放つ害をなす天狗として認識されていたのである。

天狗と火の害ということが明らかになったが、説話・物語における天狗像とはいささか乖離があるように思われる。しかし、注目したいのは、天狗が火をつけた、とされているのは、大塔

や僧庵など、すべて仏教関連の建造物だということである。天狗が狙うのはやはり、仏教に関するものなのである。

このように、実生活・虚構問わず、天狗は仏教に対する害をなすものとして認識されていたのである。

結章 『十二類絵巻』の主題

本章では前章で明らかにした狸の認識と、仏教の枠組みによって『十二類絵巻』が成り立っているということ踏まえて、『十二類絵巻』の主題が何なのか、という事を明らかにする。

第二章では、『十二類絵巻』が仏教の枠組みによって成り立つ作品であり、鶏の後ろ盾には天狗がいる、ということから、当時の天狗認識を確認した。当時の天狗認識は、『天狗草紙』『是害坊絵』といった絵巻、『秋夜長物語』それぞれの中で、仏教への反逆者として描かれており、『看聞日記』の中でも、仏教への反逆を示す存在として、とらえられていた。つまり虚構、実生活問わず仏教への反逆者として認識されていたことである。

『十二類絵巻』に見られる狸と鶏はどのように描かれていたかということについて、簡単に整理しておきたい。

狸について

①狸は田舎武者の中でもさらに常識がない者・とるにたらない

者として他の動物に比して低く描かれる。

②狸は出家し京上がりの本意をとげる。

③遁世し、静かな生活を手に入れ、詩作にふけるという優美な生活を送る。

狸は失敗する、取るに足りない弱者として描かれる。歌合で追い出され、合戦で度重なる敗退をし、変身を見破られ成功することのない哀れな存在として描かれる。

鶏について

①鶏は天狗と結びつき、仏教への反逆者として描かれる。

②鶏は殺され、阿弥陀仏に救済を求める。

鶏は、天狗の眷族として認識されていた。合戦をするにあたって、大きな自信を見せるが「天狗く／＼しきもの」^④として狸を裏切る。また、愛宕の太郎坊天狗に要害を乞う。天狗の後ろ盾を持つ天狗の眷属というのが鶏であった。死に際に阿弥陀仏に救済を求めていることから、仏教への反逆を示したことへの後悔が読み取れる。『十二類絵巻』の鶏の裏には、天狗の眷族＝仏教への反逆者としての認識があるということである。

『十二類絵巻』の中で、狸は田舎武者の中でも非常識な者、取るにたらない弱者として描かれ、歌合の際の推参と打擲、合戦での敗退、変身の失敗、と散々な失敗をする者であった。狸が妻子を捨て

て出家するくだりでは、「妻子眷属も、なこりを、おしみて、なくく、わかれけり、いとあはれになむ^⑩」という描写がなされ、狸の哀れを誘う姿が描かれていた。そのような弱者であった狸は、出家遁世する事で、優美な詩作にあげられる生活を送るようになり、京上がりの本意を遂げることができた。一方の鴉は仏教への叛逆を行つたために殺されてしまった。物語が仏教の枠組みを背景に持っていることを考えると、鴉⇨仏教への叛逆者は、仏教への叛逆者であつたために殺され、狸は、とるに足りない弱者ですらも、仏教への信仰を示し救済された、と読むことが可能である。

狸は『十二類絵巻』内で弱者として描かれた。狸が弱者として描かれることよつて、読者は狸の救済をより大きな感動を持つてとらえたと考えられる。

確かに、先行研究が指摘する通り、『十二類絵巻』には、戯作の要素がある。しかし、狸が主人公として設定されている以上、狸がどのような結末に至つたのが、読者の一番の関心事であり、それが当時の読者が行つた解釈であつたと考えられる。

『十二類絵巻』の結末は、失敗ばかりの弱者である狸ですらも、仏教に帰依することで京上りの本意を遂げ、当初あこがれていた詩作を心置きなくできる生活を手に入れるという結末であつた。つまり、仏教に帰依することよつて、弱者ですらも本願を成就するこ

とができる。このことを『十二類絵巻』の読者は読み取つていたのである。

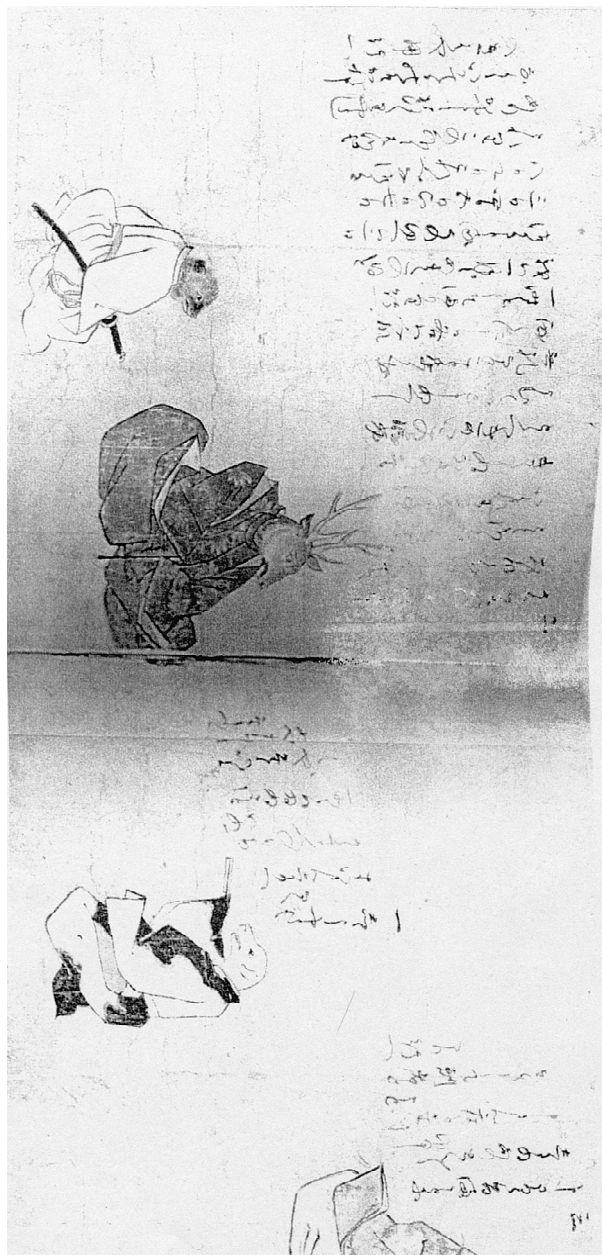
注

- ① 徳田和夫『お伽草子事典』東京堂出版、二〇〇二年五月。
- ② 松本隆信「室町時代物語類現存本簡目録」『御伽草子の世界』三省堂、一九八二年八月。
- ③ 松本隆信『室町物語大成』第七巻、角川書店、一九七九年二月、一九一―一九五頁。
- ④ 網野善彦・大西広・佐竹昭広『鳥獣戯語 いまは昔むかしは今』第三巻、福音館書店、一九九三年二月。
- ⑤ 松本隆信『室町物語大成』第四巻、角川書店、一九七六年三月。
- ⑥ 松浪久子「大阪青山短期大学所蔵奈良絵巻『十二類』上——解題・翻刻」『大阪青山短期大学研究紀要』二〇〇二年四月。
- ⑦ ①と同じ。
- ⑧ 石塚一雄「後崇光院宸筆物語説話断簡について」『書陵部紀要』一九六五年一〇月。
- ⑨ 藤岡摩里子「堂本家本『十二類合戦絵巻』について」『美術史研究』早稲田大学美術史研究会、一九九九年二月。
- ⑩ 網野善彦『十二類絵巻』をめぐる諸問題』『鳥獣戯語 いまは昔むかしは今』第三巻、福音館書店、一九九三年二月、五一―五頁。
- ⑪ 小峯和明『十二類絵巻』を読む『特定研究年報』国文学研究資料館、一九九七年二月、三〇頁・四四頁。
- ⑫ 勝俣隆「動物説話と異類物」——『十二類絵巻』をめぐる『国文学解釈と教材の研究』学灯社、二〇〇五年一〇月。

- ⑬ ③と同じ、一九五頁。
 ⑭ ③と同じ、一九五頁。
 ⑮ ③と同じ、一九四頁。
 ⑯ ③と同じ、一九四頁。
 ⑰ 角川書店編集部『絵巻物全集』第十八巻、角川書店、一九六八年七月。
 ⑱ 栃木孝惟・日下力・益田宗・久保田淳校注『新日本古典文学大系 保元物語』岩波書店、一九九二年七月、一三七頁・一三九頁。
 ⑲ ③と同じ、一九二頁。
 ⑳ ③と同じ、一九二頁。
 ㉑ ③と同じ、一九三頁。
 ㉒ ③と同じ、一八四頁。
 ㉓ ③と同じ、一八五頁。
 ㉔ ③と同じ、一八六頁。
 ㉕ ③と同じ、一七九・一八〇頁。
 ㉖ 小峯和明「画中詞の宇宙——物語と絵画のはざま——」『日本文学』日本文学協会、一九九二年七月。
 ㉗ ③と同じ、一八五頁。
 ㉘ ③と同じ、一八六頁。
 ㉙ ③と同じ、一八八頁。
 ㉚ 森正人「天狗と仏法」『今昔物語集の生成』和泉書院、一九八六年。
 ㉛ 佐伯真一氏は、天狗は天魔や怨霊と重なる、憑依する悪霊としての性格も有していた、ということを指摘されている。(『後白河院と「日本第一大天狗」『明月記研究』一九九九年一月や「憑依する悪霊——軍記物語の天狗と怨霊に関する試論——」『青山語文』二〇〇一年三月など。)本章では、このような憑依する天狗というものも考慮に入れた上で、室町時代の天狗認識がどのようなものであったのかを考えていく。

ととする。

- ㉜ 梅津次郎「天狗草紙について」『新修 日本絵巻物全集 天狗草紙・是書房絵』角川書店、一九七八年三月。
 ㉝ 「土蜘蛛草子」「天狗草紙」「大江山絵詞」詞書釈文」鳥谷弘幸編『続日本絵巻大成』中央公論、一九八四年四月、一六八頁。
 ㉞ 松本隆信『室町物語大成』第八巻、角川書店、一九八〇年二月、一九五頁。
 ㉟ ①と同じ。
 ㊱ 松本隆信『室町物語大成』第一巻、角川書店、一九七三年一月、二六五頁。
 ㊲ 宮内庁書陵部『図書寮叢刊 看聞日記二』平文社、二〇〇二年三月、五頁。
 ㊳ 宮内庁書陵部『図書寮叢刊 看聞日記五』平文社、二〇一〇年三月、二四三頁。
 ㊴ ③と同じ、二五〇頁。
 ㊵ ③と同じ、一八六頁。
 ㊶ ③と同じ、一九五頁。



図一
源氏